

—清水寺の茶屋—

清水寺の境内には5件ほどの茶屋処があります。その中の1軒の名前（屋号）がアッと驚く名前になっています。ちょっと恐ろしげな名前です。その名は「舌切茶屋」となっています。なぜこんな過激な名前の茶屋なんでしょうかね。きになるので調べてみますとアッアッアッ、これが歴史なんですか。名前とか場所とかなんとなく知っていることが関連性が出てきて繋がっているように思えます。感動ものです・・・

いまから150年前の幕末、安政の大獄の嵐が吹きまくっていたころ、登場人物は清水寺塔中成就院住職の月照（げっしょう）上人と信海（しんかい）上人の兄弟、この二人に仕えた近藤正慎と大槻重助。

月照、信海兄弟は密かに討幕運動に身を投じていたのですが、幕府方に捕らわれそうになった月照上人は盟友である薩摩の西郷隆盛を頼って薩摩に逃亡します。しかし幕府の追及を受けている西郷と月照の二人を藩ではどう処置したものか迷っているところへ、幕吏が乗り込んできて両名の引き渡しを要求しました。このうえはやむをえまい「永送りじゃ」集まった重臣たちはすでにことなかれと願っていました。永送りとは罪人や他国の密偵を日向へ送れと称して国境で切り捨て、すべてを闇から闇へと葬ることだったのです。陰暦11月15日、薩摩の公用舟に乗せられた西郷と月照は折を見て二人で海中に身を投じたのです。あわてて二人を探しやっとうち海より二人を救い上げたのですが、月照はすでにことごとく死んでおり、西郷の方は生色が蘇ったのです。報告を受けた藩庁は二つの棺桶を送り届けてきて、月照の死体は上がったけれど、西郷の死体はなお捜査中と報告し、幕吏の手前を取り繕ったのです。西郷は助けられ、菊池源吾と変名して、奄美大島に流されました。以後の活躍は周知のとおりです。このとき月照上人の友であり、成就院の執事であった近藤正慎（こんどうしょうしん）は幕府方に捕えられ京都・六角牢獄で月照上人の行方を問われて拷問を受けます。正慎は決して白状することなく耐え抜いたのですが、このままの状態が続けば耐えられなくなるだろうと、意を決し自ら舌を噛み切り、牢獄の壁に頭を打ち付け壮絶な最期を遂げたのです。これがいわゆる「舌切」の由来です。幼いころからの友である月照上人への絆を守り抜いた正慎もまた「勤王の志士」だったと云えるでしょう。

一方、月照上人に従って薩摩下向したのが大槻重助（おおつきじゅうすけ）です。月照上人の入水後、その遺品を持ち帰った重助は、京都に戻った後、捕えられ六角牢獄に繋がれます。そこで、同じく獄中にあった信海上人と再会。このとき重助は信海上人から後事を託されます。この後、信海上人は江戸に送られ、伝馬町牢内で病死されます。重助はやがて解放され、一度は生まれ故郷に帰ったものの、再び清水寺に戻り、そこで茶屋を営みながら、生涯、月照、信海両上人のお墓を守り続けました。明治7年（1874）の月照上人の17回忌の際には薩摩の西郷隆盛から上人を悼む漢詩を託されます。現在、清水寺境内北総門の北に「月照上人・信海上人慰霊碑」があります。西郷の詠んだ「相約して淵に投ず」の漢詩を見ることができます。

清水寺ではこの近藤正慎と大槻重助二人の功績に報いるため、それぞれの遺族や家族たち

の生計になればと境内茶屋の開設権利を与えます。以来、近藤正慎方は「舌切茶屋」、大槻重助方を「忠僕茶屋」と呼ばれるようになったのです。



{地獄耳}

俳優で最近ではナレーターで評判の「近藤正臣」氏はこの「舌切茶屋」の近藤正慎から見るとひ孫にあたります